

原三溪とふるさと岐阜

発表者：藤嶋会員、廣島会員、小林会員、速水会員

『三溪集』には三溪が作った漢詩や和歌が150首余り収録されています。そこから漢詩を4首取り上げて、会員4名がリレー形式で発表しました。この発表は9月2日に岐阜市で行われる原三溪顕彰講演会「原三溪とふるさと岐阜～三溪の詩歌にみる故郷への思い～」のリハーサルを兼ねています。



横浜トリエンナーレ開催中のため、いつもとは違う会場です。

「岐阜旗亭與故人飲」（岐阜旗亭で友人と飲む、発表者：藤嶋会員）は、懐かしい山や河、聞きなれたお国訛りに囲まれて、旧友たちと酔う春を詠んだ五言絶句です。旗亭とは、岐阜市米屋町にある馴染みの料亭「水琴亭」と考えられます。

「下濃州舟中作」（濃州を下る舟中の作、発表者：廣島会員）は、故郷を離れる舟で風景と心境を詠んだ七言絶句です。作られた時期は、長男が結婚し、三溪園が完成に近づき、蚕糸業においても海外支店を出すなど充実していた頃と考えられます。

「登比叡山」（比叡山に登る、発表者：小林会員）は、比叡山から琵琶湖を望み、さらに東の方角の故郷と老母を詠んだ七言絶句です。比叡山には大比叡と四明岳の二峰がありますが、四明嶽を主題とする漢詩と画が『三溪画集』に収録されています。

「省家」（せいか、発表者：速水会員）は、ふるさとの金華山のふもとから横浜に戻ろうとしても振り返ってばかりで足が進まない様子と、老いた母のいることを詠んだ五言絶句です。

岐阜に戻った時の三溪さんの心境が、各発表者の個性をもって具体的に読み解かれていく発表でした。もしかしたら、岐阜の人たちがこれらの漢詩から読み取る景色は、横浜の会員たちの想像とはまた違っているかもしれません。